新今昔物語

第43話

古堤街道を往く⑥

「古堤街道の風景～東諸福に残る往時の面影～」

諸福天満宮を後にして坂を登り街道に戻ると、道端に「天照太神宮」と刻まれた燈籠が立っています。江戸時代後期の天保2年（1831）製のもので、当時流行した伊勢神宮への集団参拝「おかげ参り」を記念して作られた「おかげ燈籠」です（市内に8基立つおかげ燈籠とおかげ参りについては別の機会に改めて紹介します）。おかげ燈籠の横には、大阪・京都・奈良・野崎などの行き先と方向を示した明治2年（1869）製の道標も立っています。

その斜め向かいを見ると、北河内地方で多く見られる段蔵が立っています。母屋より高い場所に階段状に蔵が並んでおり、水害時には家具や食糧などを避難させていたそうです。おかげ燈籠や段蔵などが残る諸福2丁目付近は、今でも街道の風情を味わうことのできる場所です。

諸福2丁目の段蔵

おかげ燈籠と道標

ここから南に向かうと、寝屋川に架かる橋に至ります。かつて寝屋川に細長い砂州が浮かんでいましたが、昭和47年（1972）の大東水害の後、河川改修によって姿を消しました。砂州には戎橋と大黒橋という二つの橋が架かっていましたが、現在は両者の名前を合わせた戎大黒橋が両岸を結んでいます。

再び街道に戻り東へ300メートルほど進むと、街道を両側から挟む形で諸福墓地があります。墓地には地元の人の墓と並んで村相撲の早碇（はやいかり）部屋の力士の墓もあります。次回は、江戸から明治にかけて盛んだった河内相撲について紹介します。

（生涯学習課）

西側から見た戎大黒橋